

近世

第8章 近世の幕開け 1. 織豊政権 (2) 織田政権

秀吉の鳥取城攻め — 日本二つの御弓矢堺 —



天正9年10月24日吉川経家自筆書状(吉川史料館蔵)★

解説

1568(永禄11)年、織田信長は足利義昭を立てて上洛を果たし、全国統一の動きを起こしていく。このとき、信長から中国地方の毛利輝元の攻略を命じられたのが羽柴秀吉であった。

秀吉は播磨・但馬を平定し、1580(天正8)年・1581(同9)年の2回にわたって鳥取城を攻撃する。1581年の戦いでは、2万人の大軍を率いて因幡へ攻め入り、鳥取城を包囲して補給路を遮断する「兵糧攻め」を行った。

これに対して、毛利側から鳥取城へ派遣されていた吉川経家は、「11月になれば鳥取は大雪になって、秀吉軍は撤退するだろう」と戦況を見通し、山陰の気候も味方につけて籠城戦を展開していった。

当時、鳥取城には1,000人以上の武将や民衆が立て籠もっていたが、戦禍によって国内の田畑が荒らされたこともあって兵糧が不足しており、時間が経つにつれて城内の者たちは飢えで苦しんでいった。

毛利軍は船で兵糧を運び込もうとするが、織田水軍に攻撃されて船団は壊滅し、鳥取城救援は絶望的になっていく。経家は城内の者たち

を救うため、自分の命と引き換えに秀吉に降伏を申し出た。この資料は切腹の前日に吉川経家が一族の吉川経言(のち広家)に宛てた手紙である。

この中で経家は、自分の置かれている状況を「日本二つの御弓矢堺(境)」と言っている。「日本を代表する二大勢力(織田と毛利)の戦い(弓矢)の境目に自分はいるのだ」という意味である。当時の鳥取城をめぐる織田と毛利の戦いは、その後の日本の行方を左右する重要な戦いであったことがわかる。

(担当:岡村吉彦)



吉川経家像 (鳥取市武道館前)

【意訳】
自分たちは鳥取において毛利家のために尽くした。こうなることは内々覚悟の上である。「日本二つの御弓矢堺(境)」において切腹することとは、末代までの名誉である。長い間、懇意にしていたことは絶対忘れない。そなたに預けている長光の刀を息子の亀寿丸に届けてもらえないだろうか。よろしくお願いします。

【読み下し文】
我ら鳥取において、御用に罷り立ち候、内々覚悟の前候条、忘却致さず候、日本二つの御弓矢堺において、忤腹^{かせはら}に及び候事、末代の名誉たるべく存じ候、累年別して御芳情の段、その期を望み失念申さず候、存じの程申すを得ず候、随つて預け奉り候長光刀、息亀寿所へ遣わされ候て下さるべく候、恐惶謹言^{きょうかうじんげん}

(天正九年) 式部少輔
十月二十四日 経家 判
経言様 参 人々御申

*忤腹:切腹のこと

参考資料

・岡村吉彦『鳥取県史ブックレット1 織田 vs 毛利—鳥取をめぐる攻防—』(2007年)